

一個人としての自分を大切に

桶川市立桶川小学校 富永 ふみ

「先生」をしない

私は「先生」に向かないタイプの人間である。夢や希望に満ち溢れているタイプの教職員のみなさまが読むに値しないような内容しか書けないのだが、それでも、一部の、ちよつと変わったタイプの方に向けて、私の経験を綴ろうと思う。

「先生」たる幻想にとらわれない

「先生」たるものは神か超人しかないない。子ども・保護者の心をつかみ、穏やかで、時に厳しい面もありつついつでも愛情にあふれ、授業は面白く、運動や芸術、音楽に長けていて、且つ人当たりも良く、理知的で、仕事も効率的にこなし、時にはカウンセラー、時には救命士にもなれるスーパーマン。『先生』である。そんなものにはなれやしない。だから私は『先生』はしないと、最初に決めてしまった。

5.3.2のバランス

ではどうしたか。まずは一個人として教師富永をスタートさせた。しかし、問題が多々あり、得策ではなかったと反省。次は教育者要素を取り入れてみた。教材研究に勤しみ、掲示物・教具の工夫等、職人のように働いてみた。一個人を前面に押し出すよりも見られるレベルになったが、労働時間が膨れ上がった。これを続けていたらいざれ死ぬ、と思ひ改善。今度は役者の要素を取り入れてみた。これが結構重要な要素

である事に気づく。実に生きやすい、実に働きやすい。小さなことも大きさに、感情表現もオーバーに、知っていても知らないふりをする。諸先輩方を観察し、良き部分や演技を取り入れアップデートする。演技することで自らの教師としての姿を客観的にとらえることができ、感情的になりにくい。諸先輩方からのご指導、保護者からのクレームに一喜一憂することなく、必要な部分を取り込み、不要なところはスルーすることで技術力、人間力もアップデートされ、教育者としても一個人としてもレベルアップする。演技、大事。

最も最優先すべきは

そうは言いつつ、最も優先すべきは一個人としての自分である。自らの健康や尊厳を損なわない程度に「適当」に仕事をするのが望ましい。そう、望ましいのだ。労働時間がアレな私が言っても説得力はないが。

日々の仕事後や行事後は、公演が終わった祝杯を同僚と共にするのも、次の良き演技に必要な不可欠である。こんな働き方・生き方をしていく人間だが、何か、一文字でも参考になれば幸いである。

お疲れさま 新たに教職員にな

特集

時間の大切さ

小鹿野町立小鹿野中学校 江田 浩

私は今年度末で定年を迎えます。長い教員生活をふり返ってみると、反省点も多々あります。その中には、経験を積むことで改善できたこともあれば、改善できなかったこともあります。

今、初任者として勤務している先生方の中には「授業がうまくいかない」「児童・生徒と好ましい人間関係が構築できない」等、日々の実践の中で苦労されている先生もいらしゃると思います。私もそのような時期がありました。当時の私にとって一番つらかったのは「この状況がこれからもずっと続くのではないか」という不安でした。その不安を解消するために、教育書を読んだり、同僚の先生にアドバイスをいただいたりしました。そして試行錯誤を繰り返し、実戦経験を積むことで、ある程度改

善できたのではないかと思います。しかし、それは「今から考えればそう思う」ということであって、当時は「少しは成長したのだろうか」という不安が拭いきれませんでした（微々たる成長かもしれませんが）。自分自身の成長に、当時は気づけなかったのです。

初任者の先生方へのメッセージ (その一)

「誰もが日々成長しています。現在の悩み（不安）のほとんどは時間が解決してくれます」

また、教員生活をふり返ってみて、改善できなかったこともあります。そのひとつに「時間の有効活用」があります。私を含

めた同世代の教員は、「いいものを作り上げるには時間が必要」と考え、夜遅くまで勤務している人が多かったようです。私たちの世代がそのような文化を作ってしまった（継承してしまった）のです。

教員の仕事は数限りなくあります。「一人一人のノートに丁寧にコメントしたい」「学級通信をたくさん出したい」「納得のいくまで教材研究をしたい」……。しかし、時間には限りがあります。すべてを勤務時間内で完璧に終わらせることは不可能です。

時間をかけることが熱意ではありません。今後は「すべての仕事を終えるには時間が足りない」という考え方を「勤務時間内で仕事を終えるにはどうしたらいいのか」という考え方に変える必要があります。持続可能な働き方を模索していきましょう。

初任者の先生方へのメッセージ (その二)

「時間をかけることと熱意はイコールではありません。限られた時間を有効に」

生徒自らが意思決定する

県立進修館高等学校 新井 夏彦

私は現在、初任として現任校へ赴任してから4年目になります。今回、新たに教職員になられた皆さんへのメッセージということで原稿依頼をいただきました。そこで私の少ない経験の中から教職員として過ごしてきた中で感じたことなどをお話させていただきます。みなさんの参考になる部分があれば幸いです。

私は採用4年目といたしましたが、今年初めて3年生の担任となっており、まだ卒業生を見送ったことはなく、その点であまり初任の先生方と経験に違いはありません。今私が不安に思うのは、やはり生徒の進路実現をどの程度サポートすることができるかという点です。3年生になっての年度当初に行われた2者面談において進学が就職かまだ迷っているといった生徒と話した

際、率直にいつて焦りを感じました。しかしふと、私が生徒以上に焦ってみても意味がないのではないかと思います。生徒自身も進路について焦ったり悩んだりしていないわけではないので、そこで教員がせかしてみてもあまりポジティブな影響があるようには思えないからです。無論客観的には進路決定や進路実現に向けた準備は早ければ早いほど良いわけですが、それはやはり原則的には生徒が主体となって行うべきものではないかと考えています。

そんな中で、最近三者面談が行われました。三者面談をしている中で、保護者と生徒が進路についてもめる場面がいくらかありました。大学への進学と専門学校への進学でもめる、専門学校への進学と就職とが決まらずもめる、といったことです。そう

した中で感じたことは、生徒は何よりも保護者や教員に進路について決定されることを嫌がるということです。たとえ自分の中で確たる進路が定まっていなくても自分自身で決定を行いたいという気持ちは生徒全員に共通のものに思えました。なかには進路が全く定まっていないというような生徒もいますが、それでも時間をかけて会話をしていくと彼らなりのやり方で進路先についてこちらの想像よりはずっと調べている場合などもありました。

そこで私は、生徒は自らで意思決定したがついてなおかつそれを大人に応援してもらいたいと思っていると思うようになりました。成長や意思決定が遅い生徒に対しては私もじれてしまいそうになりますが、こちらがあまり気を張りすぎずとも生徒は自らがなりたいたいところのものに近づいていくというくらいの気持ちで今はいまです。新しく教員になられた皆さんもあまりご自身で様々な仕事を背負い込みすぎずに、頑張っていただければと思います。これから同じ教職員として働く仲間としてよろしくお願いたします。

子どもの心と出会ったとき

県立和光特別支援学校 名古屋 暁

こんにちは！新年度が始まり数ヶ月が経ちました。新しく教員になられた先生方、新しい環境、慣れない環境の中で日々お疲れさまです。みなさんに専門的にお話できるような経験はないので、私がこれまでに子どもとのかかわりで感じたことについてお話したいと思います。なにか今後のヒントになれば幸いです。

まず、私の自己紹介をしたいと思います。現在、教員生活5年目を迎えました。学校も2校目を経験し、学校ごとの雰囲気の違いややり方の違いを感じながら、それぞれの学校の良いところをたくさん見つけることができています。学生時代、小学校教員を目指し教員採用試験を受けました。初任で赴任したのは、肢体不自由の特別支援学校でした。ボランティアに行っていた知的

障害の特別支援学校のイメージはありませんが、肢体不自由の学校は未知数で、「どんなところなんだろう」「どうやってコミュニケーションをとるのだろう」と不安を抱えたまま4月1日を迎えたことをよく覚えています。

1年目の4月、トイレに行ったときに子どもが泣き始めました。私はびっくりして、先輩教員になぜかと尋ねました。「なにか痛いことをしてまったかな」「骨が折れてしまったかな」と、本当に、本当に焦りました。先輩教員は「新しい環境で緊張しちゃったかな」と言いながら、抱きしめました。すると、泣いていた子どもが落ち着いたのです。子どもの気持ちをくみ取り、それに寄り添うこと。特別支援教育の土台になる部分を強く感じた一場面でした。

その後、小学部低学年の担任をした際、年度初めに歯科健診がありました。Kくんは、歯科健診に驚き、涙目になっていました。教室の隅で、涙目で座っているKくん「こわかったね。びっくりしたね」と声をかけると、私のところへ近づいてきて抱っこを求めてきました。こわかったよ。Kくんの気持ちが伝わってきました。子どもの心と出会った瞬間でした。

子どもの気持ちをくみ取り寄り添ったり向き合ったりすることは、特別支援教育だけでなく、全校種で通じることだと思えます。子どもの気持ちに寄り添い、真摯に向き合うことは、明日からできます！子どもたちは、大人のことをよく見ていますよね。気持ちを完璧にくみ取れなくても良いのです。向き合おうとする姿勢が大切なのではないかと思えます。ぜひ、子どもに寄り添う教育を一緒にしていきましょう。

1人1人の生徒を大切にすれば、 1人1人の生徒から大切にされる

弁護士 小林 哲彦

今回は、私が埼玉県立秩父農工科学高等学校において、2012年から2021年の10年間にわたり毎年12月末に、同校の3年生全員を対象に担当してきた、主に労働問題や消費者問題に関する「社会人講座」の経験に基づき、メッセージを送らせて頂きます。

私は、「社会人講座」において、①生徒の目線で物事を考えること、②理想と現実の間のバランスをとること、③教育の中立性に配慮しながらも自分の意見を言うことの3点を特に心がけています。

まず、①についてですが、多くの生徒は、私たちについて「自分とは違う頭のいいエリート」と見えています。ですから、私たちと彼（女）の間には見えない壁があるのが通常で、私たちの言葉は、普通感覚で述

べられただけでは、彼（女）らの心に響きません。そればかりか、彼（女）は、多感な時期にあり、コンプレックスを持っていることも多いため、何気ない上から目線の言動や態度が彼（女）を傷つけてしまうこともあります。そこで、私は、講義の際に、「生徒の目線で物事を考える」ことを第一に心がけています。

また、②についてですが、私の講義の大半は、労働者の権利などの「あるべき姿」に関するものになりますが、現実社会と私の話との間には、ギャップがあるのも事実です。そこで、私は、講義の中で、労働者の権利などを強調する一方で、「理想と現実のバランスとる」ように心がけています。

さらに、③についてですが、私の講義は、内容面において、社会問題と密接に関わっ

てきますから、教育の中立性との問題は避けて通れません。この点、私は、社会的に意見の分かれる問題については、複数の意見を紹介したうえで、自分の意見を言い、生徒自身の判断で考えてもらうようにしています。教育の中立性は、それ自体は重要なものかもしれませんが、過度に強調されると、現状を追認するだけの中身のない意味不明な講義になってしまう可能性があることは否定できませんから、私は、「社会人講座」において、「教育の中立性に配慮しながらも自分の意見を言う」という点を心がけています。

私は、講義の中で、生徒に対し、「他人を大切にすれば、他人から大切にされる」と強調していますが、このことは、家族関係・友人関係・職場関係だけではなく、先生と生徒の間にも当てはまると思います。「1人1人の生徒を大切にすれば、1人1人の生徒から大切にされる」という言葉を再確認して、私は、今後も「社会人講座」に携わっていきたいと思うとともに、新たに教職員になられた方々に対するメッセージとさせていただきます

教師は実践の中で、 子どもと共に育つ

全国障害者問題研究会事務局長 櫻井宏明

私は肢体不自由の障害児学校を中心に再任用も含めて40年間特別支援学校に勤務し、2021年に退職しました。現在、全国障害者問題研究会で非常勤職員をしています。

同僚や仲間を支えられて

学生時代に障害児教育を学んだわけでも、採用にあたって障害児教育を希望したわけでもありません。物理の教員として採用され、たまたま障害児学校（当時の養護学校）に赴任することになりました。言葉のない重度の生徒の前に、学生時代に学んだことで役立つものはほとんどないという状況でした。職場の先輩たちが校外の研究會や研修会に誘ってくれました。年齢の近い先輩にはよく悩みや愚痴を聞いてもらいました。聞いてもらうだけで気持ち楽になります。今日、職場が多忙化して同僚と

語り合う時間がとれないと聞きますが、他の仕事はさて置いて、そうした時間こそ確保したいものです。

子ども理解は一筋縄にはいかない

「個別最適な学び」について私は懐疑的です。理由は二つ。一つは、簡単に子どもが理解できるのかということ。子どもたちの生育歴や生活環境は多様で、子ども理解は一筋縄ではいきません。子どもとのかかわりの中で徐々に理解が深まるのであって、数回のアセスメントで、方針が出せるものではないと思うのです。

もう一つは、子どもが学習の主体者になっているのかということ。社会や大人の立場から知識や技能を効率よく身につけさせるという発想でなく、子どものねがいを大切にして人間関係の発達などを含めた人格の

発達の保障が重要なのではないのでしょうか。

ゆくゆくはAIが子どもの教育プランを立て、それにもとづいて教師は効率よくマニュアル通りに教えるということになるのでしょうか。教師としての面白さ・やりがい奪われるのではと危惧しています。

教師も間違いながら、発達する

ときには出勤したくないなあと思うことはないでしょうか。

教師たちの実践にエビデンス（根拠）や効率性が求められています。教師はばらばらにされ、自分の持ち場だけを守って、失敗しないように、突っ込まれないようにと、汲々としているのかもしれない。これに対して、「一人完壁に」と考えるのではなく、ときには学級や学校、地域を俯瞰して見て、「チームで補い合って」と考えてはどうでしょうか。はじめから「完璧な教師」ということはないわけです。教師だって教育実践の中で成長、発達する存在で、時には失敗してしまうこともあるのですから。

若いときの私は教室の中の仕事も満足にできず、中途半端なままで学校外の活動にも関わり、学校外の人も関係も築いてきました。しかし、後になってみるとこのことは教師としてプラスになったと思います。

病 気

◆病気休暇

病気休暇は、90日まで有給で取得可。



子 育 て

◆育児休業

子どもが3歳に達する日まで取得可能（男性も可）

◆子育て休暇

子ども1人の場合7日、2人以上は10日取得可。子どものけがや病気の看護、学校行事が対象。

介 護

◆介護休暇

病気、負傷、老齢などにより2週間以上にわたり日常生活を営むのに支障がある者の介護をおこなうための休暇。1つの継続する状態ごとに6月の期間内

※範囲／配偶者、父母、子、配偶者の父母、祖父母、孫、兄弟姉妹、事実上の父母や子



絵・島ちづる

一人で悩まず、仲間に相談を
職場のいじめ、パワハラ、セクハラ

048 (824) 2511 埼玉県教職員組合

048 (822) 7421 埼玉県高等学校教職員組合

生き生きと働きたい

働く

◆年次有給休暇

すべての教職員

◆生理休暇

1回の生理につき2~3日
(電話で伝えるだけでもOK)



結婚

◆結婚休暇

結婚生活に入るための諸行
事をおこなうために5~7
日の休暇

妊娠

◆通院休暇

妊娠中および産後1年以内に、保健指導・検診審査を受けるための休暇

◆通勤緩和休暇

妊娠中、母体の健康維持をはかるために、一日1時間以内の勤務時間の繰り上げ・繰り下げができる

出産

◆出産休暇

労基法では産前6週(多胎児14週)、産後8週。2週間の加算があります。

◆出産補助休暇

配偶者の出産にあたり、夫である男性教職員に2~3日の範囲で認められる

